ゆく人なしに

辻井喬

Takashi Tsujii

ゆくなしに

辻井喬

河出書房新社

辻井喬（つじい・たかし）
一九二七年東京生まれ。詩集に『辻井喬詩集』、『たとえて雪月花』、小説に『いつもと同じ春』、『静かな午後』など。

ゆく人なしに

一九九二年四月二〇日　初版印刷
一九九二年四月三〇日　初版発行

著　者　辻井　喬
装　幀　菊地信義
発行者　清水　勝
発行所　株式会社河出書房新社
東京都渋谷区千駄ケ谷二―三二―二
電話　三四〇四―一二〇一（営業）
　　三四〇四―八六一一（編集）
振替口座　（東京）〇―一〇八〇二
印刷　大日本印刷株式会社
製本　小高製本工業株式会社

©1992　Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4―309―00759―7

目次

なにやらゆかし 7
瀧の音 41
ゆめのあとに 85

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

物言わぬ皇子 117
ゆく人なしに 157
神の細道 189
あとがき 236

ゆく人なしに

なにやらゆかし

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

いよいよ稿を起す直前になって迷い、明け方目が覚めてしまうともう眠れません。諦めて、歩きながら考えようと、私は家の近くの丘に向いました。

十月に入りますと、このあたりはもう膚寒く、まして平城宮を見下す中腹に立つと、人の気配のないせいか、露もしとどに、うら枯れはじめた木の葉を重く濡らして、霜が降りる季節が近付いていると報せているようです。

東西南北に、唐の都を模して作られた街のあちらこちらから、朝餉の仕度をしているのでしょう、薄紫の煙が立昇って、ある高さまでゆくと横に棚曳き、朝靄と混り合っています。私はもう三百年近くも前に、仁徳天皇が山の上から民衆の生活状態を視察したという故事を思い出しました。私はこの天皇を好きになれませんでした。儒教という外来思想に影響された最初の帝のように思われ、我が国の古代は、こうした為政者めいたポーズとは関係なく、もっと大らかで闊達な

ものだったはずだという気がしきりに動くのです。そんな私の歴史観を表現するのに、どうしても漢文体はふさわしくありません。今上陛下から、「阿礼誦習の帝紀、旧辞を撰録せよ」との御命令があったのは先月の十八日のことでした。天武天皇が亡くなられたために中断されたままになっていた史書の完成という大役をいただいた時、私は躊躇せざるを得ませんでした。英雄叙事詩の時代から今日にかけての、幾度かの戦争、内乱、そして遷都、歴代天皇の御名、正統の確認、山陵の模様など、天皇家の成立、発展に関する神話、伝説、歌謡を、末端の氏族の縁起にいたるまで、今のうちに整えておく必要は、たしかに誰の目から見ても明らかではあります。まして、平城宮が立派に完成し、また隣の唐の国威が盛んで、すでに百済は滅ぼされ、我が国を窺う形勢にあるようなこの時期に歴史編纂が行われるのは、まことに時宜に適ったことであります。

御即位の当座は、中継ぎの帝などと陰口を言われていた陛下も、年と共に貫禄をつけられ、我が国はもともと女帝の時代の方が国が栄えたという者も出てくるような落着いた時代になっておりましたが、そのような今上陛下から、「一日も早くこの仕事にかかるように」との仰せを承った時、私は謹んで御前を退出する以外に身の処し方を知らなかったのです。

私は思いあまって親友の紀朝臣古麻呂（きのあそみこまろ）の家に相談に行きました。彼は私と文雅の席を並べている同僚です。専門は漢詩で、名誉欲や出世欲がなく、自由な人柄で安心のできる友人です。

「それは君、大変なことだ。名誉ではないか、親友のために乾盃しなきゃ」という反応には、少

しも嫉妬の影がなく、私はいくらか気が楽になったのです。私が率直に迷いを打明けると、
「分るよ、それは。しかし君の親父さんは大海人皇子について真先に兵を挙げた壬申の乱の殊勲者だ。陛下はおそらくそのことも考えて人選をなさったのだろう」
そこまで言うと古麻呂は急に考え深い目付になって口を噤みました。私に促されてようやく、
「もしかすると陛下は君にもうひとつの機会を与えたのかもしれない」と言うのです。彼の説明によれば、壬申の乱で勝ったのは確かに天武帝を名乗られた大海人皇子ですが、人脈の厚さからいつのまにか天智天皇の系統が主流になっておられるのです。そう言えば今上陛下も、やがて後を継がれるであろうと噂されている御息女も、お血筋としては天智天皇の直系ですから、私などをも含めた天武派はいつのまにか傍流と見られるようになっている訳です。私の才能を買っておられる陛下は史書編纂を命ずることで、私に主流派に入る機会をお作り下さったのではないか、と古麻呂は畏れおおい推測を述べ、それには、
「天武天皇の御業績もさることながら、中大兄皇子を名乗っておられた頃から、革新政治家としての御才覚のまぎれもなかった天智帝のことをどう書くかが試金石だなぁ」などと言います。稗田阿礼の誦じるとおりではなく「撰録せよ」と仰せられたのはそういう意味だ、と彼は解説してみせました。
もともと、中大兄皇子、大海人皇子と呼ばれておられた頃から、天智帝と天武帝は仲のいい御

兄弟でしたが、お二人の性格ははっきり違っていたようです。中大兄皇子は、なかなか表に出ようとはなさらず、次々に御親族を帝にお立てになり、御自分は実力者として鎌足等と組んで改革を推進されたのです。ただ、目的達成のためには、お妃の父石川麻呂が殺されたように、何人と雖も容赦なさいませんでした。異母兄の古人大兄皇子の場合もそうです。父の死を悲しんでお妃が後を追われても、取残された三人の御子達が母を慕って泣く様を御覧になっても、天智帝は顔色もお変えにならなかったと言われています。

そのような方だからこそ、大化改新も成功したのでありましょう。政治というのは、そのようなものなのでもありましょう。天智帝が私心のない方であられた証拠は、後のことをあまりお考えにならずに薨じられたのでも分るのです。大友皇子は、英雄の御子息にありがちな、善良で決断力のない方でありました。そのために近江朝には、帝に取入って権勢を我が物にしようとたくらむ野心家が屯(たむろ)し、小さな争いが絶えず、その様子を見て、叔父になる大海人皇子は、吉野に退かれて僧籍の人になられたのです。それを知って近江朝の奸臣達は「大海人皇子を殺さずに吉野に行かせてしまったのは、虎に羽をつけて野に放ったようなもの」と、忠義顔して訴え、「御謀叛の兆があります」などと言いふらしました。日に日に強大になる唐の動静が伝えられてくるにつけても、私の父なども、政治のことは分らないながら、早く強い指導勢力を作らなければと切歯扼腕していました。

天智帝の御他界を待っていたかのように、世情は騒がしくなりました。近江朝は吉野を討つために兵を集めている、御陵建設というのは口実にすぎない、という噂は、当時私共がいた美濃国にまで聞えてきました。額田女王と大海人皇子の間に生まれた十市皇女が大友皇子の妃になっておられるから、争いは起らないと解説する者もいれば、皇女は鮒の包裏焼の腹のなかに、御父上討伐の準備が進んでいるとの手紙を入れて内通なさったらしい、とまことしやかに囁く者もおりました。

その額田女王と十市皇女、それにまだ幼い葛野王が突然私達の陣屋に立寄られたのです。父と私は高市皇子の指示で近隣の兵を率いて湯冷邑を発進し大津に向っておりました。豪族の屋敷を借りて陣屋を作っていた私達の前に立たれた御一行のお姿は、この世のものとも思えぬ気高さでありました。昼に近く、強い日射しの、やや逆光線の翳りの中のお三方は眼深に被っておられた笠をお取りになると、額田女王が「多臣品治はおられますか」と初陣の私に尋ねられたのです。それが父のことを指すのだと気付くまでには、いくらか時間がかかりました。それほど私は呆然と、この三人の御姿を眺めていたのです。額田女王は四十歳ぐらい、十市皇女は二十四、五歳になっておられましたでしょうか。あわてて走り出てまいりました父に、

「まことに残念なことでありますが、近江朝は吉野を討つ兵を挙げられました。私は、お三方を戦乱の外にお連れ申せとの高市皇子の命令で、こちらに御案内を致しました」

と護衛の兵士が口上を述べます。
「これが書状にてございます」と差出された手紙に父は目を走らせ、押し戴いてお三方を内に招じ入れました。大津に進撃するまで、不破の関を押えるこの陣屋で過した六日間は、私にとって忘れられない日々になりました。
額田女王が神に仕える巫女であると聞いて、
「何故、神に祈って争いを鎮められないのですか」と私はお尋ねしたのです。武芸の稽古よりは書を読む方が好きだった私は、父の命で従軍はしたものの、勇みに勇んで戦にはやる父達を見て、鬱陶しい気分になっていたのです。それでいて私は、汗にむれた軍服の匂や馬の嘶きには、何かうっとりするような魅力を感じてもいたのですが。
まだ恐いもの知らずの年齢ゆえの無遠慮な質問にも、額田女王は少しも不愉快な様子を示されませんでした。
「安万侶、そなたの疑問はもっともです。しかし、神ほど嫉妬深いお方もないのですよ」
もちろん、私には理解できないお言葉でした。知識としては、額田女王が中大兄皇子と大海人皇子の御兄弟に愛された方だとは知っておりましたが、それがどういう意味なのかまだ充分には分っておりませんでしたから、こんな質問もできたのだと今になっては脇の下から汗の出る想いです。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com